



自他共に認める祭り好き。「提灯を作って祭りを見て歩いて。好きなことを仕事にできて良かった」と笑う今野則夫さん

提灯や灯籠を制作

和紙を張った提灯を台に固定し、下絵に沿って滑らかに筆を走らせる。迷いなく、文字や絵柄にあつという間に色を入れていく。今野則夫さん(68歳)は提灯を作って35年。「はじめのころは手が震えだすよ。でも、何回も繰り返して自然と技術が身につきました。描いて描いて、体で覚えまして」

今野木工所には、地元・角館のお祭りこと「角館祭りのやま行事」はじめ、県内外さまざまな地域から祭りの提灯、神社仏閣の灯籠作りの依頼が入る。1階から3階まである作業場には、全国各地の提灯や灯籠が所狭しと並んでいた。

冬の副業として制作

提灯作りで見せるきりりとした表情とは一変、祭りの話になると無邪気な笑顔になる今野さん。角館のお祭りでは20歳から40歳まで20年間、町内の責任者を務めた。今野木工所は、今は亡き父が昭



町の提灯屋さん

〔今野木工所〕 仙北市角館町小館28-10 TEL.0187-55-5573

桜の青葉が風にそよぐ仙北市角館町。
6月下旬、桧木内川堤のほりにある今野木工所では、
夏から秋の祭りを控えて提灯作りが最盛期を迎えていた。

動も忙しい。そんな多忙な日々を支えるのが、息子、正則さん(43歳)と正則さんの妻、めぐみさん(42歳)。家族3人で提灯作りを精を出す。

各地の祭りを見て歩く

提灯作りの基本工程は、木型を組み立て、竹ひごをらせん状に巻き、縦糸を張って骨組みを作りから始める。最近では竹ひごの代わりに和紙を巻いたワイヤーを使うことも多い。

骨組みの表面に、のりで和紙を張り、絵付けを行う。仕上げに、防水効果のある提灯油を塗って自然乾燥させる。

「6月は忙しいといってもまだまだだ。これから夏場は夜も作業するほど忙しくなりますよ」

完成した提灯を持ち、今野さんは車を運転して全国各地へと納品に行く。「1日10時間運転して岐阜の高山まで行くなんて普通です」。そう話して楽しげに笑う。

高山から天橋立へ、琵琶湖から

和20年ごろに設立。戦後まもなくは家具作り、高度経済成長期は建具の仕事で忙しかった。一方、冬は極端に仕事が少なかったという。「暇でストープにあたっていても何もならない。仕事を待っているだけではダメになる」

そう考えて2代目の今野さんが冬場に始めたのが提灯作り。「祭りが好きだから作ってみるか」と思い立ち、独学で作りを始めた。先代には「建具に専念しろ」と反対されたが諦めなかった。

木型から作る

作り方を学ぼうと訪ねたのは岐阜県にある大手の製造元。当然、職人に技術を教えてもらうことはかなわなかったが、「あんた、建具屋だったら自分で作れるだろ」

と、骨組み作りに必要な木型だけちらりと見せてもらった。その記憶を頼りに、角館に戻って木型や道具を自ら作り、何年と試行錯誤を繰り返しながら技術を確立した。

「建具屋なので木型から自前で製造できる。だから丸型でも細長でも、特大でも、さまざまな形、大きさの提灯が作れる。そこがうちの強みだな」

現在、常備する木型だけで50種類以上。木型から製造を手がける提灯屋は全国でも数少ない。

祭り提灯、御神燈など、依頼は、一年を通して北海道から九州まで全国各地から寄せられる。それらを引き受けつつ、角館のお祭り保存会の会長、角館祭りのやま行事実行委員長を務める今野さん。会合に出席するなど、祭り運営の活

四国へ、出雲大社へ。あちらこちら車で回りながら各地の祭りを見て歩く。その地ならではの文化、風情、音、人々の思いなどを肌で感じながら、日本の祭り文化に思いをはせる。「どのお祭りも、その土地ならではの『味』があつて素晴らしい。他の祭りを見て学ぶことは多いすな」

外に刺激を得て、角館、そして秋田の祭りの今後につながるヒントを探し続ける。「仕事も祭りも、長く続けていくには、内にこもって狭い視野で物事を考えていたらダメだと思ふすな。どんどん外に出て視野を広げないと後に続かない。外のことを知って学ばなければ、歴史や伝統は守れない。そう思います」

根っからの祭り好き。だから、提灯も祭り人の気持ちに立って、丁寧に仕上げる。「町紋でも文字でも、その土地に受け継がれてきた形や味を忠実に再現するように心がけています」

今年も各地の祭りに提灯の柔らかな明かりが輝く。